

馬のいない馬車

小説空間における荷役動物とその〈隠される仕事〉について

南谷 奉良

はじめに

シンポジウム「英文学と仕事」における本発表では、小説空間における荷役動物の仕事を考察した。荷役動物による交通・運搬手段が主だった時代の小説では、馬や犬、ロバやラバ、ラクダ等の動物が存在することで、手紙や郵便、荷物、食料や資材、ニュースや登場人物が別のページと別の空間に届けられ、物語の展開が可能になるが、特に近代の小説と密接な関係をもつ 18 世紀以降の都市間交通を担った馬については、表象の上でその仕事が不可視化され、隠される場合がある。本発表はこの観点から、(1) H. G. Wells の *The Invisible Man* (1897)、(2) George Orwell の“Marrakesh” (1939)、(3) Anna Sewell の *Black Beauty* (1877) を取り上げ、ある特定の仕事が隠される様態と、それを可視化するための視点を考察した。なお「隠される仕事」のコンセプトについては、20 世紀後半以降の産業形態において不可視化される労働を論じた Marion G. Crain らの *Invisible Labor: Hidden Work in the Contemporary World* を援用した。

1. H. G. Wells, *The Invisible Man* (1897)

もともと“The Man at the Coach and Horses”という題の短篇として書かれ、それが引き伸ばされた作品 *The Invisible Man* の物語は「駅馬車亭」という宿ではじまる。透明人間になった男が駅に預けてある大量の実験器具を馬車で宿まで運んでほしいという依頼を受けると、宿を経営するホール夫人は宿が険しい道の先を経由するために、つい一年ほど前にも死亡事故が起きたと説明する。この時、“A gentleman killed, besides his coachman.” (Wells 9)として、事故の犠牲者には乗客と御者が数えられるだけで、死亡者が出るほどの事故において四輪馬車を引いていたはずの二頭の馬の命運については何も触れられない。透明人間が忽然とアイピング村に現れたことに続けて、彼の「荷物」が宿に到着する記述では、馬の不在がより顕著である(“this singular person fell out of infinity into Iping village. Next day his luggage arrived through the slush”) (Wells 16)。この「彼の荷物が雪解けのぬかるみ道を通して到着した」という語りのなかで、馬は完全に不可視化され、「荷物」という主語のなかに同化している。それはまるで透明人間が手中に収めた硬貨を運ぶ“butterfly money”の様子を思わせて、“a vision of ‘a fist full of money’ (no less) travelling without visible agency, along by the wall” (Wells 69)、労働を担っている“visible agency”が不在の記述になっている。言うまでもなく、このような記述は英文学小説の伝統的慣習・法則の一つであり、特に馬車につながれた馬の場合、当の労働を担う agency の生きた馬の身体は、“carriage”や“luggage”で置き換えられたり、馬具や鞭、蹄の音といった換喩表現の陰に隠れることがある。同作 18 章におけるケープ博士の疑問“Is there such a thing as an invisible animal?” (Wells 85)に事寄せれば、小説のなかの荷役動物、特に馬は「馬車」と同化することでいわば「透明動物」(invisible animal)になり、その仕事と存在が隠される事態を本発表の問題意識とした。

2. George Orwell, “Marrakesh” (1939)

インド帝国警察の警察官、浮浪者としての生活、ホテル厨房での皿洗いの仕事、ホップ摘み、荷運び人、鉱山労働、従軍記者、BBC ラジオ局の放送作家、雑誌の文芸編集等で働いた経験をもち、意図的に様々な階層の職種に触れた George Orwell は、「見えない仕事」や「隠される仕事」に対して、明敏な問題意識を持ち続けた作家であった。特に社会階層上のステータスが低い人間や動物によって担われる基幹的な仕事が「地上の世界」から不可視になる事象への関心は、*Down and Out in Paris and London* (1933)から鉱山労働を取材した *The Road to Wigan Pier* (1937)にまで通底する、Orwell の持続的な関心となっている。1939 年に雑誌 *New Writing* クリスマス号に発表された“Marrakesh”でも、ある存在が見えなくなり、認知や視界から脱落するという奇妙な認識の様態を扱っている。例えば褐色の皮膚をもつ貧しい人々がモロッコの赤茶けた土や建物の色に溶け込むようにして没個性化し、固有名や固有の身体が欠如する様子や、手仕事で作業をする人々が不可視になること、薪を運ぶ老いた女性が見えなくなり、空中を薪が上下するヴィジョン(“Firewood was passing—that was how I saw it. ...and the curious up-and-down motion of a load of wood drew my attention to the human being underneath it.”) (Orwell 49)などが描かれている。特に薪に関する記述は、表象のレベルにおいて“his luggage arrived through the slush”とよく似ており、労働の主体を担う visible agency を隠す構文になっている。“Marrakesh”の観察と記

述は字義通りに解釈すれば、帝国主義下における白人支配者層の偏見とレイシズム、驕りが剥き出しになった観察文に見えるが、Douglas Kerrも指摘するように、これらを Orwell 自身の認識や観察として読むべきではない。いずれも、人種的、職業的、経済的優劣の認識が織り込まれた非対称的な関係性を維持する権力者層・支配者層・消費者層が採用する認知や視覚、無意識を代理的に語り手の観察者が取り込んでおり、そうした認知バイアスを突きつけて、その非人道性を読者に自覚させるレトリックのもとで書かれている。現に Orwell は餌をあげたガゼルによって自分が透明化され、パンが空中に浮いているヴィジョンも描いており、権力勾配のある搾取的な関係にもとづいた「見る／見られる」の力学に意識的である。そして、ここまでの考察で得られた三つの文 “Next day his luggage arrived through the slush” (Wells 16) / “Firewood was passing—that was how I saw it.” (Orwell 49) / “if it[the gazelle] could drive me away the bread would somehow remain hanging in mid-air.” (Orwell 45) を並べれば判明するように、ある労働の営為は、語り手や観察者の認知の上だけでなく、それを表現する文において不可視化されることがある。本発表では、この不可視化の暴力を克服し、荷役動物を顕在化させる視点を Anna Sewell の *Black Beauty* に求めた。

3. Anna Sewell の *Black Beauty*

Sewell の *Black Beauty: His Grooms and Companions. Autobiography of a Horse* は、馬を代表とする荷役動物の仕事がいかに大変で、人間の共感がない場合にはいかに苦痛を伴うものかを読者に理解させるために、馬の一人称の語りと自伝的小説の形式を借りた教訓物語である。その執筆動機には、19世紀後半における荷役馬の酷使の状況および馬の頭を高く掲げたままにする「止め手綱」(bearing rein) の装着を特に問題視しながら、御者や馬丁、調教師や厩務員等、馬に関わる仕事を行う人々、そして、ファッションとして馬を利用していた上流階級のなかに、「優しさと共感と馬の理解ある扱い」を涵養する目的があった。Sewell は馬の一人称を通して、遮眼革をつけた視界の狭窄、坂道を上り下りしたり、客を待つことにまつわる辛さ、調教、断尾や去勢、馬具の装着によって気性、意思、感情、身体を制御される不自由を描きながら、荷役動物の苦痛と労苦を読者に伝えようとする。19世紀には動物を一人称とする形式の小説が見られたが、動物が感じているだろう「主観的な痛み」と経験を通じて、その代理的な声を表象した点が Sewell の一つの発明であった。

もちろん言葉で馬の内面を代理表象する自伝形式は、人間中心主義を免れ得ず、“what that is, up and down those steep hills, only horses know”(Sewell 176)といった言葉による語りはその矛盾をみずから晒している。しかし、それでも、馬を主語として文頭に立てることで、馬車の先頭には馬が立っていることを読者に強く知らしめる点で、*Black Beauty* は荷役動物が登場する小説を読む読者の認識を変える啓発書にもなり得る、と本発表では結論した。

4. 〈透明動物—馬車—透明人間〉のヴィジョン

再び Wells の *The Invisible Man* の記述に戻ってみれば、小説空間における「透明動物」の存在がより明確になるだろう。誰からも見られないという特性を得た透明人間は、都市の雑踏のなかでハンサム馬車の後ろをついていけば(周囲が勝手に避けてくれるため)ぶつからずに済むという妙案を偶然思いつき、馬車の真後ろに続き、ぬかるみが凍った地面を素足で歩く—“I staggered out of the way of the cab, avoided a perambulator by a convulsive movement, and found myself behind the hansom. A happy thought saved me, and as this drove slowly along I followed in its immediate wake” (Wells 104)。この記述において、透明人間が隠れている馬車の前方には一重い荷物を運んでぬかるみを走ってきたにもかかわらず、その仕事を隠され続けてきた—「透明動物」が確かに存在している。私たちがここで〈透明動物—馬車—透明人間〉というヴィジョンを想像することが、伝統的な小説の法則が読者のなかに構築してきたハビトゥスを批判的に意識する一つの契機となる。

引用文献

- Crain, Marion G., et. al, editors. *Invisible Labor: Hidden Work in the Contemporary World*. U of California P, 2016.
Kerr, Douglas. “Orwell, Animals, and the East.” *Essays in Criticism*, vol. 49, no.3, 1999, pp.234–55.
Orwell, George. “Marrakesh.” *Facing Unpleasant Facts: Narrative Essays*. Mariner Books, 2009, pp. 44-51.
Sewell, Anna. *Black Beauty: His Grooms and Companions. Autobiography of a Horse*. Edited by Kristen Guest, Broadview Editions. 2016.
Wells, H. G. *The Invisible Man*. Penguin Books, 2005.